

第 1 章

我孫子市の概要

第1章 我孫子市の概要

1 我孫子市の自然的・地理的環境

(1) 位置

我孫子市は千葉県北西部に位置し、柏市、印西市、茨城県取手市、同利根町に隣接する。東西約14km、南北約4kmの細長い市域で、北は利根川、南は手賀沼に挟まれた、河川・沼沿いの低湿地と、谷津と台地が入り組んだ複雑な地形となっている。面積は約43km²で、東京都練馬区や江東区と同程度の広さである。

市内にはJR常磐線・成田線が通っており、都心へ約40分でアクセスできる。そのため、都内への通勤者も多い。

我孫子市は歴史的な背景から、旧行政区分をもとに我孫子・湖北・布佐の3つの地区に分けることができる。我孫子地区にはJR常磐線・成田線の2沿線が通る我孫子駅、常磐線天王台駅、成田線東我孫子駅、湖北地区には成田線湖北駅・新木駅、布佐地区には成田線布佐駅がある。



図5 我孫子市の位置



図6 我孫子市の地区と交通機関

(2) 地形

我孫子市の地形を単純化して表現すると、西から東へ流れる利根川と手賀沼の二つの水系に挟まれ、馬の背状の台地とその周辺に広がる低地で成り立っている。この地形によって、台地から手賀沼や利根川が眺望でき、台地上の住宅地から坂を下ると水田の広がりを感じられ、我孫子市の風景を特徴づけている。市内を東西に貫く台地は、北総台地の一角をなし、標高は18～20m内外となっている。この台地は、関東ローム層と呼ばれる富士火山帯、箱根火山帯などを中心とした火山から噴出した火山灰が40万～1万年ほど前に堆積した土壌を基盤とする。我孫子市周辺の関東ローム層の下層には、常総粘土層と呼ばれる白色粘土層が堆積している。台地上に降った雨は地表からいったん浸透するが、この粘土層で浸透を遮られ、谷津の奥や崖地のあちこちで湧水として湧き出し、かつては手賀沼、利根川に注いでいた。湧水点が点在するような崖下の斜面を関東地方ではハケと呼び、崖下の道を「ハケの道」と呼んでいる。ハケは川・沼から谷津沿いの水田、斜面林へ

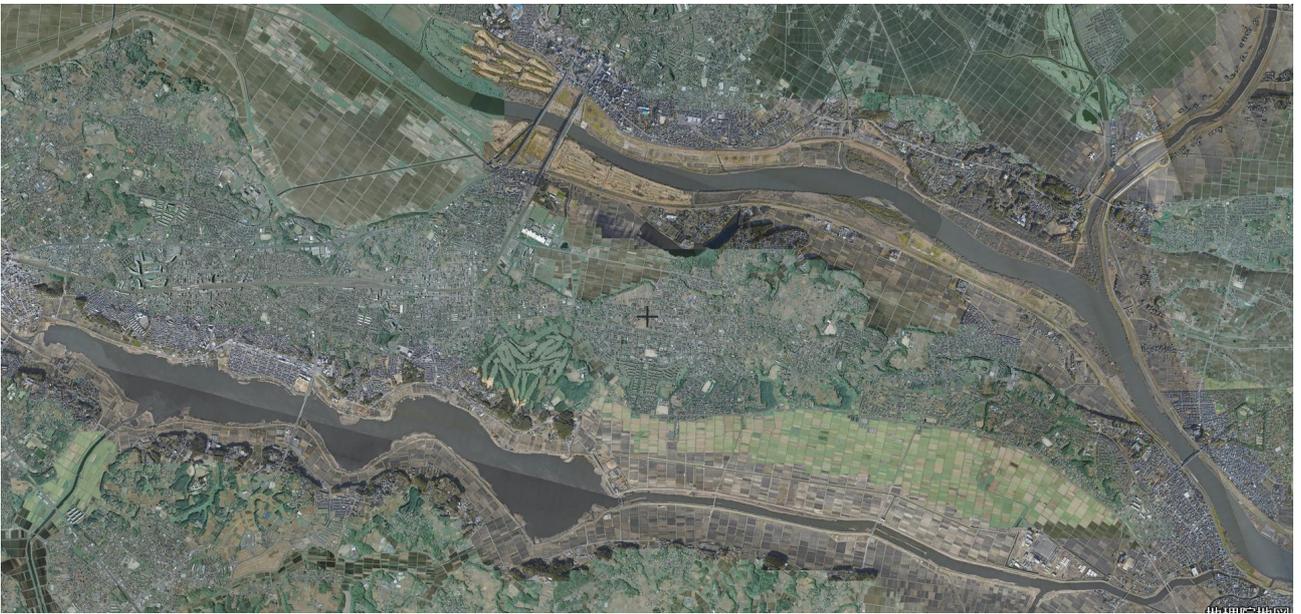


写真1 我孫子市の航空写真



図7 我孫子の原風景のモデル構造

『我孫子市環境基本計画（平成24年4月改訂）』より

の境目となる場所で、市域中央付近の東我孫子と湖北台の間に残る谷津田、ハケ、斜面林には人と自然が調和した姿がよく残り、「谷津ミュージアム」(P13で後述)として保全されている。しかし、残念ながら市域全般では台地上で宅地開発等が進行し、雨水の浸透も減っていると考えられる。またコンクリートによって覆われた斜面地も多く、湧水点や湧水量も減少している。

(3) 気候

我孫子市がある千葉県北西部は関東平野中央部に典型的な気候区で、冬の北寄りの季節風が強い。過去5年(平成27<2015>~令和元<2019>年)を見ると、平均気温は14.9℃、平均降水量は年間1376.4mmである。北西部は降水日数が千葉県で最も少なく、年間110日程度である。日降水量30mm以上の強い雨は年間10日程度で、6月と9月に多い。

(4) 手賀沼のすがたと変遷

①手賀沼のすがた

手賀沼は、首都圏30km圏内で唯一の天然湖沼である。手賀沼の面積は6.5km²(650ha)、周囲38km、水深平均0.86m、最深3.8m、水量は560万tである。流域自治体は我孫子市のほか、柏市、松戸市、流山市、鎌ヶ谷市、印西市、白井市の計7市で流域面積は143.98km²、流域人口は53.3万人となっている。

②手賀沼の変遷

後期更新世(約126,000年前から12,000年前)の海面低下によって形成された下総^{しもづま}台地の浸食谷が手賀沼の原型となった。さらに氷河時代の終了に伴う縄文海進によって海水が流入して溺れ谷となり、中世までは「香取海」と呼ばれる広大な汽水域と繋がっていたと考えられる。その後、沼尻の土砂堆積に伴って香取海とは分離し、独立した湖沼となった。

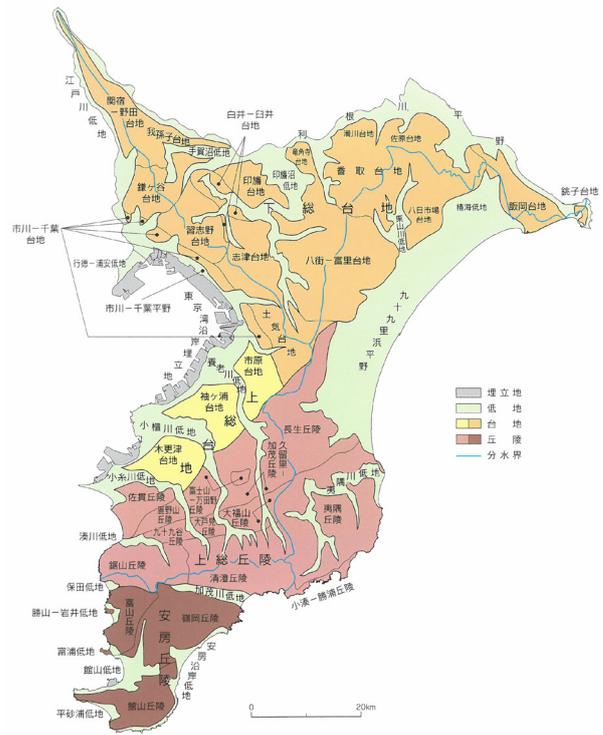


図8 地形地域区分図
『千葉県の歴史』別編地誌3(地図集)より



図9 我孫子市の気温と降水量(5年平均)

手賀沼はかつて「つ」の字型の広大な湖沼だったが、江戸時代以降、台地側の湿地から干拓が進められ、「新田」が広がった。干拓がはじまり、沼の面積は少しずつ小さくなっていったものの、大正12（1923）年の記録によると約3,000haあった。

明治末期になると、都心に近く自然豊かな手賀沼の畔は別荘地としての条件を備えていたため、講道館を創始した嘉納治五郎が別荘を設けたことを皮切りに、大正・昭和にかけて白樺派をはじめとする多くの文人たちや文化人、企業家などが移り住んだ。

昭和初期になると手賀沼東部の大規模な干拓が行われた。太平洋戦争後は、食糧増産の急務によって昭和21（1946）年に手賀沼の干拓事業がはじまり、昭和43（1968）年に完成した。干拓地は二つに分かれ、第一干拓地は沼南町布瀬（現柏市）の東66.2ha、第二干拓地は我孫子市都部新田^{いちぶ}以東の368.4haで、計434.6haとなった。また、前述の手賀沼干拓事業とは別に昭和34（1959）年頃から大遊園地を手賀沼に建設する計画が浮上した。約23.4haの埋め立て工事を行ったものの計画はとん挫し、その埋立地は造成され分譲地となった。その結果、手賀沼の面積は大正時代と比べて約20%の650haとなった。

昭和30年代後半頃から人口増による湖水の汚濁が進み、昭和49（1974）年から平成12（2000）年まで湖沼汚濁日本一となってしまった。しかし、市民と行政が一体となり流入物質の抑制や啓発活動に取り組んだほか、平成12（2000）年に水質浄化等の役割を持った北千葉導水路が開設したことで、水質は大幅に改善した。手賀沼周辺は四季を通じて野鳥が多く集まる場所であり、手賀沼公園や遊歩道にはバードウォッチングを楽しむ市民や、ウォーキングやランニング、サイクリングなどのために足を運ぶ来訪者も多い。手賀沼遊歩道周辺に、広々とした水面、季節によって移り変わるヨシ原や水田の風景など豊かな自然が広がっており、様々な種類の鳥や生き物を見ることができる。



図10 手賀沼とその周辺



写真2 手賀沼と我孫子市（中央が手賀大橋）

(5) 利根川の変遷

中世から近世のはじめにかけて、利根川の下流は現在と流路が異なり、多くの派川に分かれ、洪水のたびに流れを変えながら江戸湾（現東京湾）に注いでいた。江戸時代になると舟運の開発と安定を求め、「利根川東遷」と呼ばれる河川の再編成事業が行われたが、結果として市域を含む現在の利根川中下流域の洪水をめぐる状況に多大な変化をもたらした。



図11 河川改修について

利根川東遷の中核工事である、利根川の水を常陸川筋に流し込む赤堀川の掘削は、元和^{げんな}7（1621）年にはじめられ、承応^{じょうおう}3（1654）年に通水が成功し、大型船の通行も可能になった。前後して鬼怒川、小貝川の流路も常陸川に注ぐように付け替えられ、常陸川の水量が増した。明治になると海外から治水工事の技術が持ち込まれ、利根川改修計画が作成された。この計画は舟運・洪水対策・新田開発等、複合的なものとなっていたが、工事の主体は舟運の確保を目的として行われる河岸工事や河床の浚渫^{しゅんせつ}などを行う低水工事であった。しかし、この工事は相次いで大規模な洪水被害に見舞われ、未完成のままになった。その後、低水工事から、氾濫防止を目的とし、最高水位を計算して堤防工事や放水路の整備などを行う高水工事へと転換し、昭和5（1930）年に竣工した。この工事により河岸が消滅し、居住区の移転も必要となった。高い堤防によって利根川と居住区が完全にわけられたことにより、そこで生きてきた人々の生活に大きな変化をもたらされた。現在では蛇行した河道の名残として「古利根沼」、「梶池^{かじいけ}」などが残っている。



図12 古利根沼、梶池の位置図

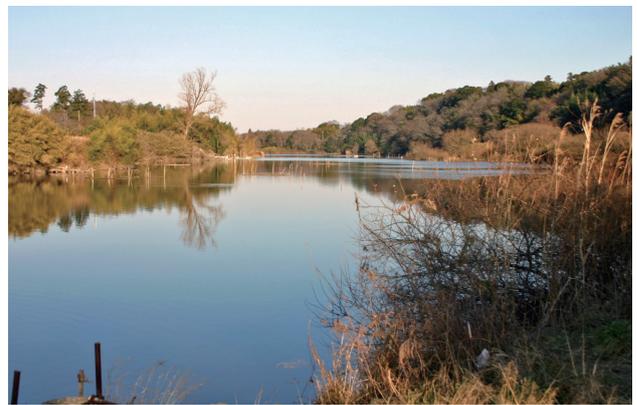


写真3 古利根沼

(6) 自然

①手賀沼周辺

手賀沼は、かつては30種類以上の水生植物が生息する水生植物の一大宝庫であった。豊かな水生植物は魚や鳥の餌となり、多様な生態系を維持することにつながった。しかし、干拓の進捗によって東半分が水田化し、沼として残った西半分も水深が浅くなると同時に水質が悪化、現在では一部の抽水植物が見られるのみとなった。また、特に冬鳥であるガンカモ類は、江戸時代には網を使った組織的な狩猟が行われるほど手賀沼に飛来したが、現在では種類・数とも減少している。一方、水田化した地域では水路や休耕田などに植物や昆虫、両生類などが生息し、狭い範囲であるが現代に残された貴重な自然となっている。

②谷津

谷津とは、台地に谷が入り込む独特の地形で、雨が浸透して湧き出す湧水帯を伴い、沼や川へとつながる細長い低湿地であり様々な生き物を育む場であった。水の干上がること

のない谷津の奥部は昔から水田として利用された。これを谷津田と言う。現在谷津田の多くが埋め立てられ、住宅地として利用されているが、市では平成14(2002)年から、岡^{おか}発^{ほつと}戸・都部地区の谷津36.7haをまるごと保全し、かつての農村環境の復活をめざす「谷津ミュージアム事業」を行っている。谷津ミュージアム内には動植物が多く生息しており、市指定文化財である「ヒカリモ」も発生している。



写真4 赤い枠内が谷津ミュージアムの範囲



写真5 谷津ミュージアム内のヒカリモ
(市指定文化財)

③手賀沼から谷津周辺で見られる生物

現在、手賀沼から谷津周辺にかけてみられる生物は以下のとおりである。

- ・植物…ウワミズザクラ、ムラサキシキブ、ツリガネニンジン、ウラシマソウ等
- ・水生植物…アシ(ヨシ)、マコモ、ヒメガマ、ガシャモク等
- ・魚…コイ、ゲンゴロウブナ、ギンブナ、モツゴ、トウヨシノボリ、ヌマチチブ、ワタカ等
- ・水生生物…スジエビ、テナガエビ、シナヌマエビ等
- ・両生類・爬虫類…ニホンアカガエル、アオダイショウ、ヤマカガシ等
- ・鳥…オオバン、カルガモ、マガモ、オナガガモ、ダイサギ、カイツブリ、ミサゴ、オオタカ、ノスリ、カワセミ、ジョウビタキ、モズ、ヒヨドリ、コゲラ等
- ・哺乳類…ニホンノウサギ、イタチ等
- ・昆虫…ウチワヤンマ、オニヤンマ、ジャコウアゲハ、カブトムシ、タマムシ、ヘイケボタル等

なお、上記のほか外来生物のアライグマ、ハクビシン、コブハクチョウ、ウシガエル、ブラックバスなども増えてきており生態系への脅威となっているため、それらの生物への対処が課題となっている。

④斜面林

台地と谷津・手賀沼をつなぐものとして斜面林がある。かつては手賀沼沿いの斜面林の多くが松林であったが、昭和40年代以降マツクイムシの広がりから枯死するものが現れ、

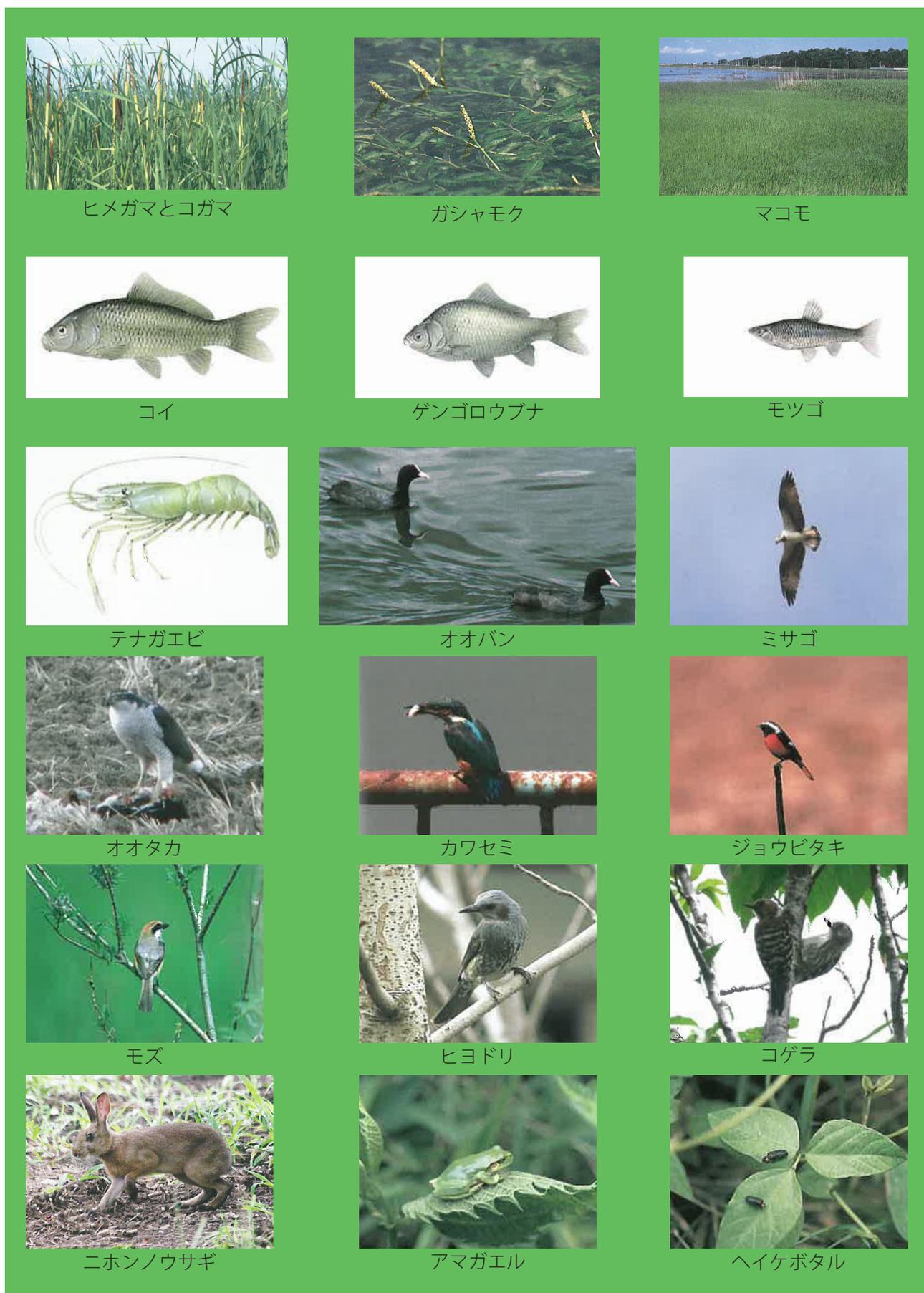


図13 手賀沼周辺で見られる生物

現在では民間企業の敷地内など、わずかに残るのみである。それ以外は現在、ケヤキ、クスノキ、シイ、マツ、イロハモミジ、モウソウチクなどの雑木林となっている。雑木林も後世に形成されたものであるが、昆虫や鳥のすみかとして残された貴重な自然となっている。近年、斜面林も宅地造成によって失われることが目立つようになってきた。このため市では斜面林を保全し、市民が自然とふれあい親しみながら自然観察や自然体験活動を行うことができる「市民の森」（岡発戸・中里・布佐）として残す取り組みを行っている。

（7）手賀沼周辺の自然に関する施設

①我孫子市鳥の博物館

「人と鳥の共存をめざして（Harmony among Birds and People!）」をテーマに平成2（1990）年5月22日に開館した鳥の博物館は、日本唯一の鳥類専門の博物館である。約3,500点の資料を所蔵し、手賀沼と鳥の関係や人と鳥の共存について考える常設展示のほか、年に3回企画展を行っている。常設展示では2階に「手賀沼の自然と鳥たち」、3階で「鳥の起源と進化」、



写真6 鳥の博物館外観

「世界の鳥コーナー」、「最後の1羽にならないために」といった展示を行っている。「世界の鳥コーナー」では、ダチョウの仲間からスズメの仲間まで、世界の鳥1科1種を目標に収集した標本約270点を見ることができる。それぞれの展示を通して、人と鳥はどう関わり、共存していくか、自然と調和して生きていくにはどうしたらよいかを考える展示となっている。また、市民と協働し、博物館友の会とともに自然観察会や体験学習、テーマトークなど市民の鳥への愛着や理解、自然保護の心を醸成するため、様々な活動を行っている。

②^{やましな}山階鳥類研究所

昭和7（1932）年、山階^{よしまろ}芳麿博士が私費を投じて現在の東京都渋谷区南平台にある山階家私邸内に建てた鳥類標本館が前身。昭和17（1942）年には文部省から財団法人の許可を得て、財団法人山階鳥類研究所を設立。昭和59（1984）年、建物の老朽化や研究所の面積不足などにより、我孫子市高野山に移転。移転には、当時手賀沼が汚濁し、浄化を願う市民の想いに応えるため、我孫子市が鳥類を通じた自然保護研究活動でも知られる山階鳥類研究所の誘致を行った経緯がある。所蔵標本7万点、蔵書およそ4万冊を擁し、鳥類学の拠点として基礎的な調査・研究を行うとともに、アホウドリ・ヤンバルクイナ等の絶滅危惧種の保全研究や、環境省の委託を受けて鳥類標識調査を行っている。また、研

究活動をわかりやすく紹介するニュースレターを発行するなど、鳥類学の普及啓発活動を行っている。毎年11月に行われるジャパンバードフェスティバルでは、普段非公開の研究所内で、研究所の職員によるミニレクチャーが行われる。

③我孫子市手賀沼親水広場「水の館」

水に親しむ機会を通して手賀沼の水環境保全の大切さを学ぶ施設。平成3(1991)年の開設当初は県の施設だったが、平成27(2015)年に県から市に移管されたことに伴い策定された「手賀沼親水広場等活用計画」に基づき、平成29(2017)年にリニューアルオープンした。1階では昔の漁具、手賀沼に暮らす鳥の模型や魚、植物などの展示、2階では手賀沼の成り立ち・



写真7 手賀沼と「水の館」

水質の経緯といった歴史、我孫子市の文化について学ぶことができる。また、プラネタリウムや展望室のほか、屋外には回遊路やベンチ、パラソルが設置され、夏季には子どもが遊べるじゃぶじゃぶ池がある。

また、水の館には我孫子市産の野菜・農産物加工品を扱う農産物直売所や、レストランが併設されている。

④手賀沼公園

手賀沼は昭和10(1935)年、きよすみやま清澄山、かのうざん鹿野山、九十九里等とともに全国で最も早い県立公園指定となった。昭和27(1952)年には印旛沼と併せて、県立印旛手賀自然公園(総面積約66.6ha)とされ、昭和50(1975)年には、自然公園内の手賀沼中央付近北岸(我孫子市)に都市公園である手賀沼公園(同4.7ha)が設置された。この公園には遊具やふれあい



写真8 平和記念碑(右)から手賀沼を臨む

あい岸边、子ども広場のほか広島市から原爆で被爆した旧市庁舎の側壁と敷石を譲り受けて建設された平和の記念碑等がある。また、公園の突端にある周囲を一望できる“リーチ岬”からは、イギリス人陶芸家バーナード・リーチのエッチング「手賀沼」を彷彿とさせる景色を楽しむことができる。



写真9 バーナード・リーチ「手賀沼」



写真10 リーチ岬から見た夕陽

⑤高野山桃山公園

平成22(2010)年に整備された高野山桃山公園には、1.56haの敷地内に眺望を楽しむ高台と、緑を保全した斜面林、湧水を利用したビオトープの3つのエリアがある。この公園を整備するにあたり行った発掘調査で、これまで市内最古であった水神山古墳を100年以上も遡る3世紀後葉の前原古墳が発掘され、方墳が2基見つかった。

公園から手賀沼に向かっては視界を遮るものがなく、沼を一望することができる。台地を降りた先にある水生植物園の藤棚の道をたどると、手賀沼遊歩道へとつながっている。



写真11 高野山桃山公園からの眺望

2 我孫子市の社会的状況

(1) 人口の状況

我孫子市の人口は令和2(2020)年1月1日の時点で132,183人である。

平成23(2011)年の136,217人をピークに減少傾向にあり、令和2(2020)年に実施した将来人口推計²では、令和9(2027)年には128,119人となっている。年齢別にみると、年少人口と生産年齢人口はすでに減少傾向に転じている一方、高齢者人口は増加傾向にある。

このような人口の動向から、今後、我孫子市では歴史文化の担い手の減少が考えられるため、担い手の確保について検討する必要がある。

1 手賀沼湖畔にあり、100mに及ぶ藤棚のほか、春先から夏にかけて、あじさいや菜の花、花菖蒲など様々な花が咲き誇る

2 国立社会保障・人口問題研究所の将来推計人口をもとに、合計特殊出生率を1.25とし、20代・30代の転出超過を2割削減としたと仮定した場合の将来人口推計

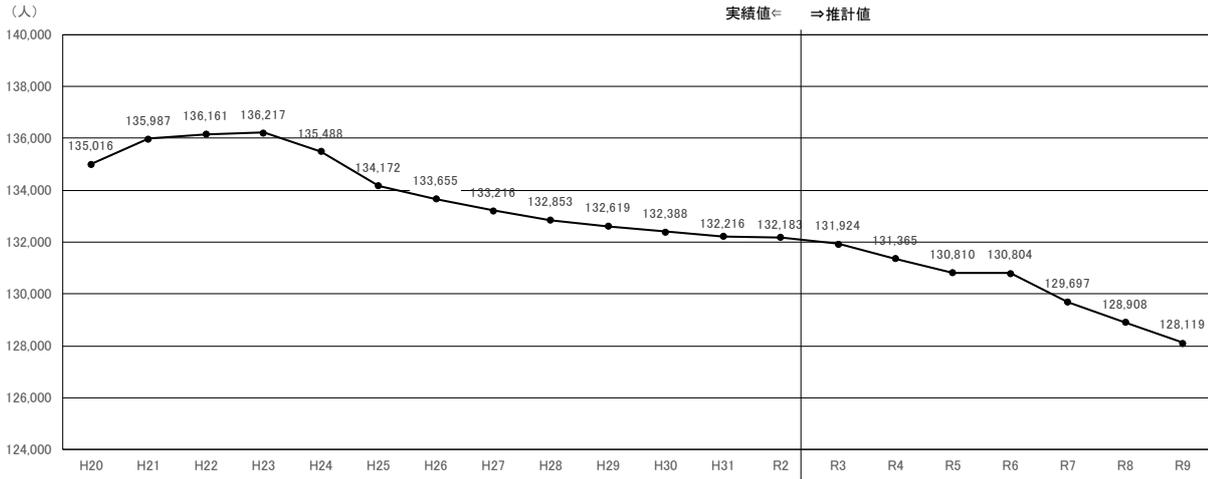


図14 我孫子市の人口推移と推計【資料：第四次総合計画 人口の見通し (R2.9)】



図15 年代別人口及び年代比率
【資料：第四次総合計画 人口の見通し (R2.9) をもとに作成】

(2) 産業

工業は近年、事業所数や事業者数が減少傾向にある。農業は水田を中心に市域の約3割が農地であるが、農家1戸あたりの農業総生産額は販売農家総数364軒のうち、売上100万円未満が189軒と半数以上を占める。販売農家数は平成12(2000)年に700軒だったものが、平成27(2015)年には417軒とほぼ半減している。高齢化や担い手不足によって農地の遊休化や耕作放棄地の拡大が懸念される。

(3) 交通

我孫子市民にとって主要な交通機関の1つが鉄道である。JR常磐線(快速線・緩行線)とJR成田線が通っており、駅は市内に6駅ある(うち1駅は無人駅)。特に我孫子駅は常磐線と成田線の分岐点であり、1日平均乗車人員は31,584人、1日の市内利用者数の51%を占めている。平成27(2015)年の「上野東京ライン」

の開業により利便性が向上したものの、乗降客数が伸びないため、本数の増加が望めないという現状がある。

道路は、国道6号・国道356号、千葉県道8号線(船橋我孫子線)が通り、国道16号とのアクセスも至近となっている。16号を通過して常磐自動車道柏ICまでは約7kmと近接し、都心や成田空港、筑波研究学園都市へのアクセスも良好である。我孫子駅・天王台駅などを起点として、路線バスのほか、公共交通不便地域を中心に市民バス(あびバス・アイバス)が運行されている。

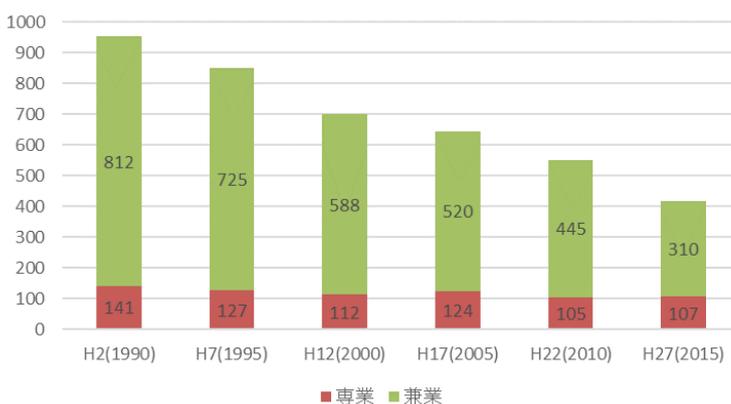


図16 販売農家数の推移【資料：農林業センサス】

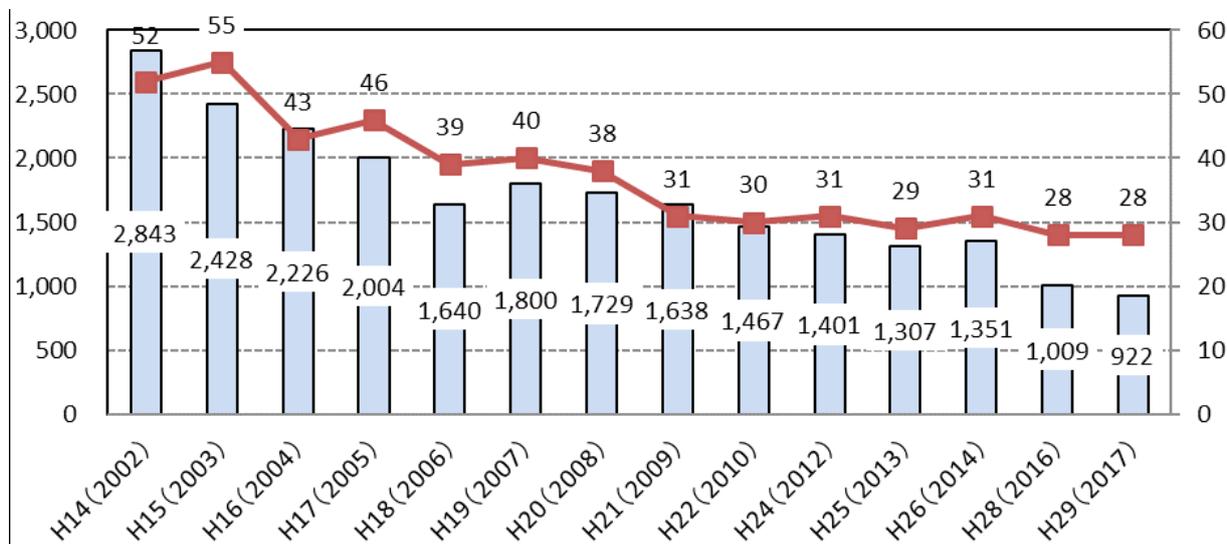


図17 事業所数・事業者数の推移【資料：我孫子の統計2018】

(4) 宿泊

市内には旅館・ホテル業を営む事業所が4軒ある。令和元(2019)年に行った調査では、前年1年間で約38,500人の宿泊者があり、このうち外国人宿泊者は700人弱である。NEC我孫子事業場があるため、ビジネスユースが中心である。これは我孫子市が東京から1時間弱で往来できる立地であること、柏駅前や「つくばエクスプレス」柏の葉キャンパス駅周辺のように事業所や研究所、スポーツ施設が集中する地区とは異なり、宿泊して2日間以上過ごす必然性をもたらす要因が少ないためと考えられる。

(5) 教育機関

市内にある学校は、大学2校(私立)、高等学校4校(私立・県立)、特別支援学校1校(県立)、中学校6校・小学校13校(いずれも市立)である。

令和2年9月1日現在、小学校児童数は6,007人、中学校生徒数は3,069人である。市内我孫子地区と湖北・布佐地区で偏りが見られ、我孫子地区の児童・生徒が全体の約72%を占めている。

(6) 生涯学習施設

① 公民館

我孫子市には公民館が2か所あり(我孫子地区・湖北地区)、公民館学級や講座、長寿大学など生涯学習に関する様々な取り組みを行っている。平成31(2019)年の統計によると、延べ利用者数は我孫子地区公民館が122,107人、湖北地区公民館では73,854人である。我孫子地区公民館は後述する我孫子市民図書館本館との複合施設で、「生涯学習センター『アビスタ』」として市民に親しまれ、利用されている。なお、展示スペースでは、文化財の展示を通して広報活動を行っている。



写真12 アビスタ(市民図書館・公民館)外観

② 市民図書館

我孫子市民図書館は、我孫子地区にある本館、湖北地区にある湖北台分館、布佐地区にある布佐分館の3館で構成されている。そのほかに移動図書館そよかぜ号が市内を巡回している。平成31(2019)年統計資料では、一般書の蔵書数は303,789冊、児童書は117,669冊である(うち、郷土資料として一般書19,431冊、児童書88冊が含まれている)。利用カード登録者数は49,394人。貸出数は1,026,557冊となっている。

3 我孫子市の歴史

(1) 地名の由来

「我孫子」の地名の由来は諸説あるが、「アビコ」という地名は様々な表記をとりながら全国に認められる（安孫子、阿彦など）。また『日本書紀』、『続日本紀』などの古代の文献に、「ウジ名（いわゆる名字）」、「人名」などで散見されたことから、古代史学者直木孝次郎は『阿比古考』のなかで、大和王権に従う豪族のウジ名であり、古墳時代中期に遡ると考察している。我孫子市には大和王権との結びつきを想起させる水神山古墳、根戸船戸遺跡1号墳などがあり、「我孫子」の地名の由来を考える上で興味深い事例となっている。

なお、現在の我孫子市域を示す「あびこ」の最古の使用例が熊本県立図書館に寄託されている古文書『三池文書』にある。この文書に含まれる鎌倉時代末の正和2（1313）年の日付がある「尼しんねん譲状」には、「しもつさのくにあひこのむら」を譲り渡す、とある。この「あひこ」が「我孫子」のことを指していると考えられている。

(2) 歴史概況

①後期旧石器時代（約 35,000 年前～ 15,000 年前）

我孫子地区にあった後田南遺跡からは約32,000年前の関東ローム層中から後期旧石器時代の槍先型の石器が出土しており、この時代から我孫子市内で人々が活動していたことがわかっている。



写真 13 後田南遺跡から出土した石器

②縄文時代（約 15,000 年前～ 3,000 年前）

布佐平和台の造成時に発掘調査を行った布佐余間戸遺跡からは我孫子市内最古の縄文時代草創期（約 12,000 年前）の縄文土器が出土している。

3,000 年前の縄文時代後期には古鬼怒湾が海水と淡水の混じる「汽水域」となり、豊かな生態系を利用して集落と貝塚が形成された（下ヶ戸貝塚など）。貝塚からは縄文人が食べた獲物の骨（シカ、イノシシ、カモ、スズキ、コイなど）のほか、日常生活で使用した土器、石製品（石斧、石棒など）、装身具（耳飾り、ペンダント、ヘアピンなど）、祭祀具（土偶、土板など）が大量に出土し、彼らの生活の豊かさ、精神性を知ることができる。



図 18 縄文時代のムラ（イメージ）

1 三池文書は、加藤・細川両家に仕えた旧熊本藩士肥後三池家に残る文書であり、軍勢催促状（南北朝時代）や知行宛行状（近世）などの武家文書で構成されている。三池家は、古くは鎌倉御家人として筑後国三池庄の地頭職を得、室町・戦国時代には国人領主として活動した

③弥生時代（約 3,000 年前～西暦 250 年頃）

我孫子市内では日秀西遺跡、岡発戸新田貝塚^{ひびりにし おかほつとしんでん}で弥生土器の出土が認められるものの、遺跡分布は極めて薄い。

④古墳時代（西暦 250 年頃～ 710 年）

4 世紀後葉の水神山古墳は千葉県北西部地区最大の前方後円墳（全長 69m）である。この古墳に埋葬された人物が大和王権とのつながりを持ち、周辺を支配していたことを想起させる。古墳時代中期の 5 世紀代には金塚古墳^{かねづか}（根戸）が造られた。金塚古墳は小型の円墳ながら鉄製の短甲^{たんこう}など、当時最新鋭であった武具類が出土している。6 世紀以降の古墳時代後期には、手賀沼沿いを中心に古墳群（子ノ神古墳群^{ねのかみ}、高野山古墳群^{たにわ}）が形成され、印波地域^{いんぱ}（現印旛沼周辺）で出土するものと同じ職人が製作した埴輪が出土しており、地域間の交流を物語る。7 世紀前葉の古墳時代終末期と推定される根戸船戸遺跡 1 号墳の横穴式石室からは、大和王権から下賜^{かし}されたと考えられる頭椎大刀^{かぶつちのたち}が出土しており、注目される。



写真 14 水神山古墳から出土したネックレス

写真 15 根戸船戸遺跡 1 号墳から出土した頭椎大刀のレプリカ
上は出土時の状態、下は当時の状態を復元

⑤奈良・平安時代（710年～1185年）

奈良・平安時代には、大和朝廷は律令体制のもと、日本全国を六十余の国に分割し、国をさらに郡という単位に分けて統治した。国には国府、郡には郡衙ぐんがと呼ばれる役所が置かれて統治を担った。我孫子市は下総国相馬郡に属し、これまでの発掘調査の結果、「相馬郡衙」が市内湖北地区に所在していたことが指摘されている。旧千葉県立湖北高等学校（現千葉県立湖北特別支

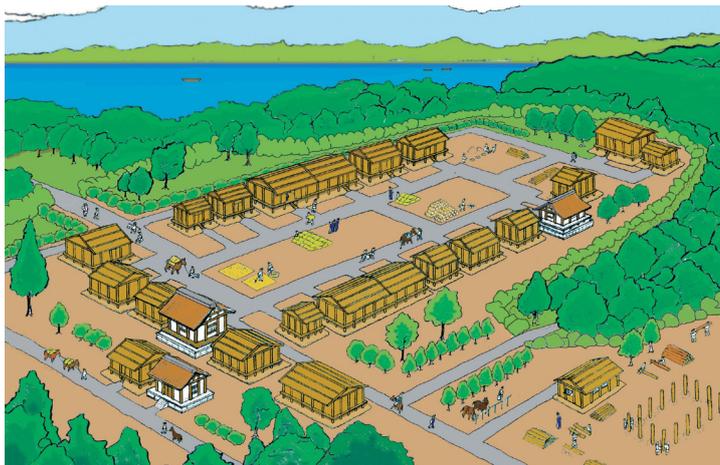


図19 相馬郡衙の正倉（イメージ）

援学校）設置に伴う日秀西遺跡の発掘調査では、郡衙を構成する重要な施設である正倉しょうそうが確認された。周辺の発掘調査で郡衙の区画溝みぞや関連する竪穴建物群・掘立柱建物群が確認され、古代地方都市の様相を示している。この相馬郡衙はおおよそ10世紀頃まで存続したと考えられる。

奈良の東大寺正倉院に残された、「正倉院文書」には「下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍そうまぐんおぶごう」があり、養老5（712）年の下総国相馬郡に居住した人々の様子を伝えている。この戸籍には73名の人名が記されるが、うち65名が「藤原部べ」姓を名乗っている。一方『続日本紀』を見ると、「藤原部」は天平宝字元（757）年に「久須波良部くすはらべ」と改姓されたことがわかっている。湖北・新木周辺の遺跡からは9世紀初頭の土器に「久須波良部くすはらべ」姓の人名が記された墨書土器3点が出土しており（「意布郷久須波良部千依女ちよりめ」等）、正倉院文書の記述を裏付ける貴重な事例として、我孫子市指定文化財となっている。



写真16 湖北・新木周辺から出土した「久須波良部」姓の墨書土器（レプリカ）



写真 17 正倉院文書「下総国倉麻郡意布郷養老五年戸籍」のレプリカ（部分）

平安時代中期になると、関東では平将門が台頭する。平将門の乱の経過を示す資料『将門記』には平将門が訪れた土地が記されており、そこで我孫子市域と平将門との関係を見ると、相馬郡に関しては「相馬郡大井津を以て号して京の天津と為さん」とある。この大井は柏市の大井とする説が有力である。平将門の本拠地は我孫子の北方となる現在の茨城県坂東市付近とされ、柏市大井を勢力下においたとするならば、我孫子市域が平将門の影響を受けていたと考えることができる。



図 20 大井の位置

平安時代後期には我孫子市域を支配していた千葉氏の一族である相馬氏が、自らの領地支配を確実にするために、大治5（1130）年、伊勢神宮に領地を寄進し、「相馬御厨」となったことを示す文献が残されている。相馬御厨の範囲は相馬郡のおおよそ北半分を占めたようである。

⑥鎌倉時代～室町時代（南北朝時代・戦国時代）（1185年～1603年）

鎌倉幕府草創期に千葉常胤が源頼朝を支援したことから、幕府の有力御家人となり、全

国各地に領地を得た。その後、常胤の子師常^{もろつね}が相馬郡を支配し、相馬氏を名乗った。本貫地である相馬御厨の中心地がどこにあったのかは不明だが、南新木地区の造成に伴って発掘調査が行われた羽黒前遺跡^{はぐろまえ}からは中世の方形居館^{ほうけいきやかん}が発見され、相馬御厨との関連がわかる。相馬氏は鎌倉幕府の有力御家人としてこの地を継続して支配していたが、相続の際、一族間で細分されたようであり、「あひこ」（我孫子）の所領を譲り渡した記録がある。

相馬氏は南北朝時代の分裂を経て、次第に関東10か国を統治した鎌倉公方の影響下に置かれるようになったと考えられる。享徳3（1454）年に勃発した「享徳の乱」以降、我孫子市域を含む千葉県北西部地域は、鎌倉公方足利氏と関東管領上杉氏^{かんれい}、そしてそれを取り巻く人々の争乱の地となった。松戸市の本土寺に保存されている『本土寺過去帳』には、度々「討死」といった記述がみられるようになる。長享2（1488）年には「アヒコ彦二郎（我孫子彦二郎）が武蔵高見原（埼玉県小川町）で討死した」ことが記され、軍勢として従軍した人がいたことがわかる。16世紀のいわゆる戦国時代になると、下総国の守護である千葉氏^{かさい}の家宰であった原氏が勢力を誇り、小金城（現松戸市大谷口）、手賀城（現柏市手賀）を拠点とした。市内に所在する正泉寺^{しょうせんじ}は原氏の菩提寺であり、宝篋印塔^{ほうきょういんとう}や位牌が残されていることから、我孫子市内にも勢力を拡大させたと考えられる。

原氏の後を受けて小金城を中心として活動した高城氏は、東関東に進出しつつあった後北条氏と協力関係を結んでいた。市域中部の中峠城^{なかびょう}は高城氏と同じく後北条氏と協調していた河村氏の居城であり、河村氏は豊臣秀吉の小田原攻めの際に、北条方に参陣して滅亡したと伝えられる。また市域西端部の根戸城跡^{ねのじょう}は、太田道灌築城伝説が残るが確証はなく、明瞭に残る主郭、土塁や空堀などの構造から見て、16世紀後半頃のものと考えられている。市域を跨いで西側の柏市中馬場遺跡^{なかまば}には中世遺構（土塁・堀・土坑・掘立柱建物等）が広がっており、城郭とまちが一体となるような政治・経済の中心地であったことがわかる。

⑦江戸時代（1603年～1868年）

江戸時代になると、中心地である江戸と水戸を結ぶ水戸道中^{みとどうちゅう}（現水戸街道）が整備された。関ヶ原の戦いが終わった翌年の慶長6（1601）年には、徳川氏は街道の整備に取りかかり、日本橋を起点として全国の街道に一里塚を設置するよう指令を出した。現在も残る一里塚の位置から、江戸時代初期の水戸道中は東我孫子、中峠、布佐を通して水戸へと続いていたことがわかる。



写真18 東我孫子の一里塚

1 室町時代以降戦国時代を中心として、江戸時代初頭まで、一万人あまりの人名が記載されている

水戸道中は、天和から貞享期（1681年～1687年）に布佐・布川經由から取手・藤代經由に変更となった。これは、後述する利根川の改修工事のなかで寛文期（1661年～1672年）に行われた利根川通水が失敗し、布佐・布川間の渡河点に変更されたためである。その後、旧水戸道中は成田道と呼ばれ、成田参詣の際に使われる道となった。

新しい水戸道中と旧水戸道中（成田道）の分岐点は我孫子第一小学校前の三叉路であり、今も道しるべ「水戸成田道標」が残っている。新しい水戸道中は三叉路を北に曲がり、柴崎を通過して青山で利根川を渡り、取手宿へと進む道となっている。



図22 水戸道中の挿げ替え

一方、河川交通では、東北地方からの物資を銚子經由で江戸に運ぶために利根川東遷が行われ、布佐には湊が設けられた。布佐湊では、江戸時代後期には幕府から鮮魚の荷下ろしが公認され、布佐から松戸までを結ぶ「なま街道」によって、布佐は鮮魚の中継地点として繁栄した。

そのほかに、手賀沼の資源として水辺に育つ真菰は水田の肥料となり、モク（藻草）も沼からの恵みとして重要で、モクトリ（藻草取り）が周辺の住民の間で頻繁に行われていた。また、真菰は魚の住みかとなったことから、漁業も盛んであった。手賀沼の鰻は有名で、都市部で消費された。鰻とともに珍重されたのは、鴨である。鴨は江戸時代以前から狩猟されていた。江戸時代になると、当初は御鷹場として幕府によって管理され、のちに水戸徳川家がこの地を拝領した。厳しく密猟が取り締まられる時期もあった

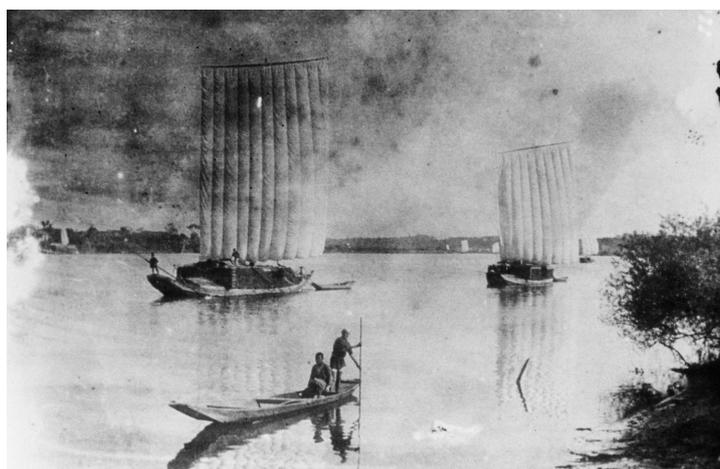


写真21 利根川を物資が往来する様子

が、寛政元（1789）年になると藩財政が逼迫していた水戸藩が御鷹場を返上したことで、周辺の村は鷹場役負担や農業、漁業、鳥猟などに対する諸規制から解放された。

鳥猟は、猟法（流獺猟）を考案した布瀬村（柏市）によって差配され、手賀沼沿岸の村々が共同で作業を行った。寛政期（1789年～1800年）から再びはじまった鳥猟は、鳥猟株を得て幕府に運上金を収め、鳥猟場を得て行った。文政期（1818年～1829年）になると、鳥猟舟が300～400艘あったという。また、この時期、布瀬村の香取鳥見神社本殿の再建に有力な江戸の水鳥問屋が多額の寄附をしている。このことから、手賀沼鳥猟が江戸の水鳥問屋にとっていかに重要な比重を占めていたかが推測される。

江戸時代前期には、幕府によって手賀沼干拓事業が進められ、手賀沼に「千間堤」（現 JR 新木駅南側付近）を作って沼を締め切ろうとしたが、うまく進捗しなかった。享保年間には江戸の町人が請け負う形で新田開発が進められた。布佐の相島新田に残る旧井上家住宅には、新田開発を担うために江戸から移住した井上家が幕末に設けた母屋ほか9棟の市指定文化財建造物が残っている。

手賀沼干拓から人口が増え、湖北地区には日秀村などの新しい村が生まれた。新しい村では、村人達の連帯感を生むために将門信仰が広められたと思われる。また、布佐地区では、江戸時代末期に布佐陣屋¹が設けられており、幕府は布佐をこの地域を支配する上で重要な場所と考えていたようである。



写真 22 モクトリの様子（昭和 28 年ごろ）
（『我孫子～みんなのアルバムから～』より）



写真 23 鴨猟の様子（戦後）



写真 24 現在の千間堤

1 陣屋とは徳川幕府直轄領の代官の住居及び役所で、地方行政の機能を持っていた

⑧明治時代～大正時代～昭和時代～現在（1868年～2020年）

明治時代になると、我孫子市域は葛飾県、印旛県の一部となり、明治6（1873）年には千葉県に位置づけられた。明治22（1889）年には千葉県南相馬郡我孫子町、布佐町、湖北村と富勢村の一部となった。

我孫子町では飯泉喜雄町長の主導のもと、鉄道と駅の誘致運動が起こり、明治29（1896）年に常磐線我孫子停車場を開業し、同34（1901）年には成田線も開通した。東京からの交通の便が良くなった結果、様々な文人・実業家などが手賀沼の景観に魅せられ、手賀沼沿岸の高台に別荘を構えることとなる。



図23 東京近郊の主な別荘地

一方、布佐町では、鉄道の発達によって利根川の水運が下火になり、布佐湊は衰退した。この流れは大正から昭和初期の利根川堤防の改修工事に伴う堤防のかさ上げと居住区の移転によって決定的になった。

主食であるコメの増産は食糧不足に悩む日本の課題を解決するものと考えられていたため、布佐地区の手賀沼沿いでは、江戸時代中期以降、井上家が中心となって手賀沼干拓が進められていた。井上家12代目当主として婿入りした井上二郎は、もともと東京帝国大学を卒業した気鋭の土木エンジニアであり、大正時代になると本格的に手賀沼干拓事業に専心するようになった。



写真25 トロッコを使用した干拓の様子

石油発動機を利用した機械式ポンプによる排水、トロッコを用いた効率的な埋め立ては井上二郎の参画によるものと考えられる。

昭和初期にはさらに大規模に手賀沼の東部を国営事業として干拓することが計画された（手賀沼干拓の変遷についてはP31 図24 参照）。

これに反対した我孫子地区の別荘人たちを中心として、手賀沼を観光資源にするべく、様々な計画が立てられた。その1つが手賀沼の県立公園化である。千葉県では昭和3（1928）年頃から、県会で県立公園を指定しようとする議論が活発になり、同10（1935）年、清澄山・鹿野山・九十九里・手賀沼・水郷・銚子の6カ所の候補地全てが県立公園に指定された。全国で最も早い県立公園指定であった。この県立公園の指定条件は、「庭

園式の公園」ではなく「天然公園」であること、天然の風光を保全し、県立公園指定が地方開発の貢献につながることで、公園の対象地は点ではなく広範囲にわたることなどとされたことから、地元の経済活性化をめざし、さらに地域だけでなく県レベルで観光化をめざしていたことがわかる。手賀沼の県立公園指定に当たっては、手賀沼周辺に移住した朝日新聞社記者杉村楚人冠や、別荘を構えた講道館の創始者嘉納治五郎、東京帝国大学西洋史教授村川堅固むらかわけんごらが助言を求めるため、「日本の公園の父」と称された本多静六ほんだせいりくを手賀沼に招いたことが確認でき、この本多静六の招請は県立公園の指定にも一役買っていたと考えられる。

また、同時期に観光資源の1つとしてゴルフ場の建設もはじまった。ゴルフ場の建設は、町の発展を模索していた染谷正治そめやしょうじ我孫子町長が杉村楚人冠に相談し、ゴルフ場を作る発案を受け計画されたもので、コース設計はゴルファーであり、ゴルフ場設計者でもあった赤星四郎・六郎兄弟あかほししろう ろくろうに依頼した。昭和6（1931）年、我孫子ゴルフ倶楽部として開場され、政治家の近衛文磨このえふみまるも近くに別荘をつくり、ゴルフを楽しんだ。

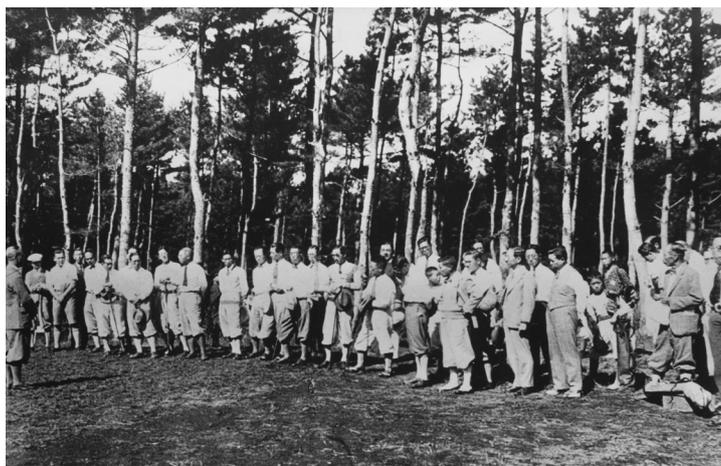
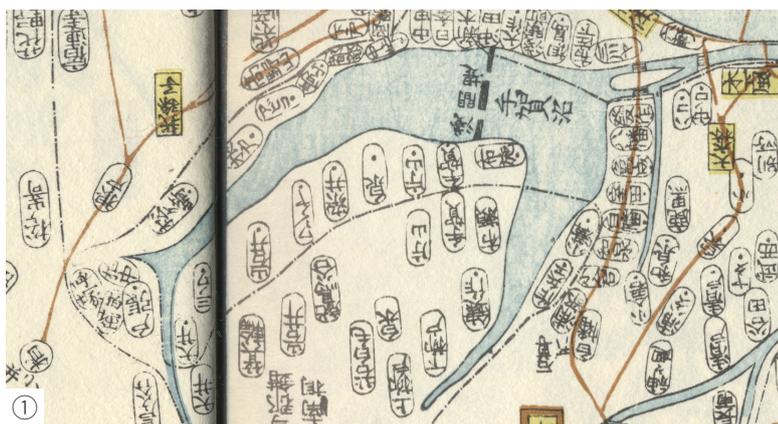


写真 26 我孫子ゴルフ倶楽部開場の様子
（『我孫子～みんなのアルバムから～』より）

その後も手賀沼を活用した町おこしとして、昭和15（1940）年に開催が予定されていた「東京オリンピック」のためのボート競技場の誘致などが計画されたものの、競技場は戸田（埼玉県戸田市）に決定したため、幻に終わった。

太平洋戦争後の昭和30（1955）年、我孫子町、布佐町、湖北村と富勢村の一部が合併し我孫子町となった。当時の人口は23,322人であった。戦後の高度経済成長を受けて人口は急増するが、道路や上下水道、学校などの公共施設整備などを急ピッチで進める必要に迫られた。手賀沼の水質悪化も我孫子市のみならず周辺地域の人口急増と下水道整備の未了に伴うものであり、戦前から続いてきた別荘地としてではなく、東京の郊外住宅地（ベッドタウン）として発展していくこととなる。昭和45（1970）年には人口40,000人を突破し、市制が施行され「我孫子市」となった。この頃から大規模開発事業に伴う発掘調査が増加し、市でも専門職員を配置して文化財を守る体制を整えていくこととなった。



上から

- ①：赤松宗旦著『利根川図誌』
安政（1855）年
- ②：明治36（1903）年地図
- ③：昭和3（1928）年地図
- ④：昭和24（1949）年地図
- ⑤：昭和44（1969）年地図

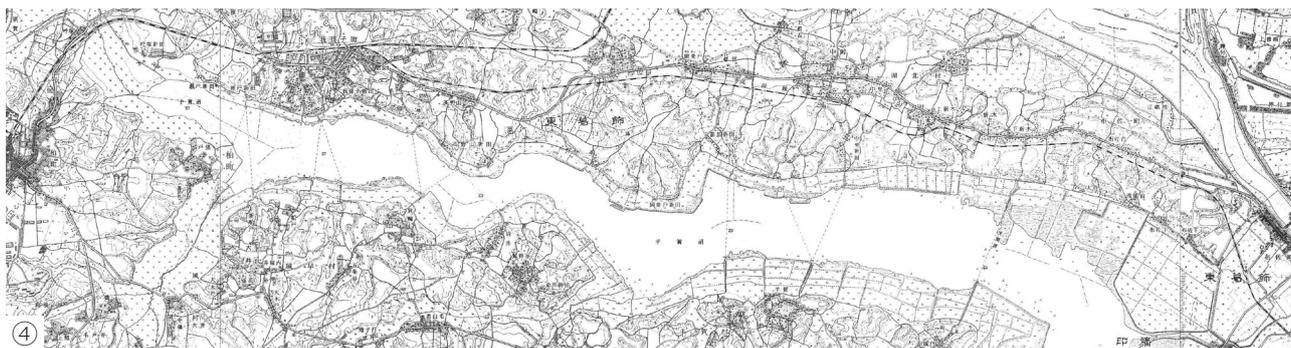
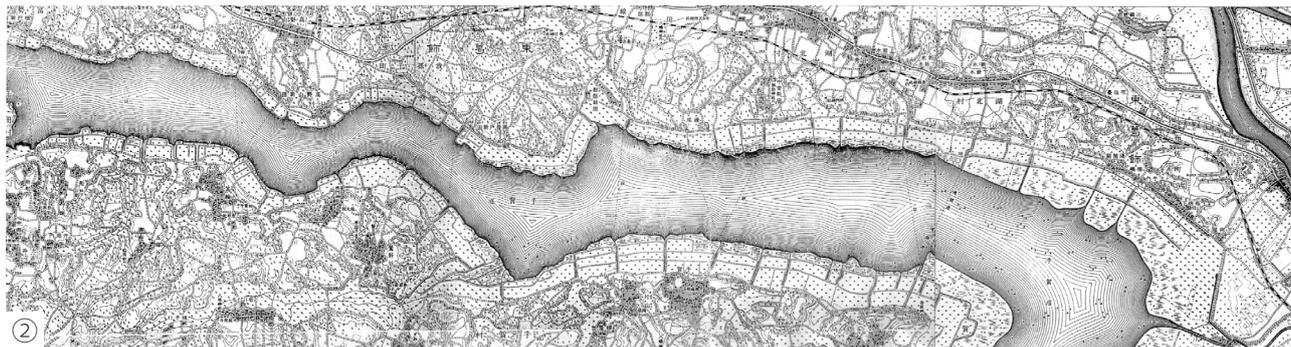


図24 手賀沼干拓の変遷

(3) 産業と交通の歴史

江戸時代以前は、基本的に台地上での畑作、谷津田での稲作、手賀沼と利根川での漁業、鳥狹などが生業の主体であったと考えられる。平安時代に相馬御厨から伊勢神宮へ貢納された物として「水田一反^{ごと}別に米一斗五升、畠一反別に米五升、雉百羽、塩びき鮭百匹」とあることから、この地域の生業の様子がわかる。江戸時代になると利根川水運の発達に伴って布佐に湊が設けられ、我孫子宿が水戸道中に設けられると、流通や製造、小売にかかわる者が現れた。

明治 29 (1896) 年に我孫子駅が開業し、常磐線が開通すると、上野駅から我孫子駅まで約 1 時間 30 分で結ばれた。その後、明治 34 (1901) 年には成田線も通じ、我孫子駅は東京方面へ向かう際の中継駅となり、都心へのアクセスが容易になった。

明治 39 (1906) 年、長野県に本拠地を置く山一林組生糸工場が操業を開始する。我孫子駅を利用することにより、茨城県や千葉県で生産されるカイコ繭の集荷がしやすく、また生産した生糸を鉄道によって輸出港であった横浜に出荷しやすかったため、とされる。一時は 300 人以上の女工員が勤務し、関東地方有数の工場として昭和 60 (1985) 年頃まで操業していた。また、我孫子駅北側には昭和 17 (1942) 年から平成 14 (2002) 年頃

まで日立精機我孫子工場が操業し、自動車製造用の工作機械を製造していたが、これも鉄道による資材運搬と密接な結びつきがあることがわかる。駅南北に巨大な工場が操業して



写真 27 我孫子駅
(『我孫子～みんなのアルバムから～』より)



写真 28 山一林組生糸工場
(『我孫子～みんなのアルバムから～』より)



写真 29 蚕霊塔

いたことは、そこで働く多くの人々の住まい、関連企業を含めた雇用などを通じて地域の経済に大きな影響をもたらした。現在、山一林組生糸工場の跡地はショッピングセンター、日立精機工場跡地は大規模マンションが建設されており、当時の様子を示すものはほとんど残っていないが、山一林組生糸工場跡北側にはカイコの慰霊のための「蚕霊塔」が祀られており、当時を偲ぶ貴重な存在となっている。

近世後期から明治時代、東京都市部へ農産物を供給していたのは練馬や千住など近隣の農村であった。しかし、明治後期からの宅地開発や工場進出が進むにつれ、農産物供給地は都市周辺部に拡大した。さらに我孫子を含む鉄道沿線で注目されるのが、農家の女性たちが担い手となった農産物の行商の発達である。行商が増えたきっかけは、大正12(1923)年の関東大震災後、都心に住む親族を見舞った人々が、被災地の様子を見て都心に食料の供給をはじめたことだと言われている。湖北、布佐付近の農家の女性たちの間でも自らの手で販路を切り拓き、鉄道を利用して都市部へと行商に出ることが盛んとなった。彼女たちは出荷組合を結成し、行商者専用車両の確保、定期券購入などを団体で行った。行商は農業生産物の付加価値を高め、農家に現金収入をもたらした。この結果、地域経済にも大きな恩恵を与えた。

布佐の湊は明治後期以降の堤防整備によって、利根川沿いの居住区が街区ごと移転を余儀なくされた。交通体系の変化は、人々の暮らしや、まちのあり方まで大きく影響を与えた。



写真30 行商の様子



写真31 行商に使った担ぎ台

(4) 災害の歴史

①利根川の洪水について

利根川は中世から近世のはじめ頃、水源から前橋あたりまでは現在とほぼ同じ流路を辿っていたが、それより下流は多くの河川に枝分かれし、江戸湾（現東京湾）に注いでいた。そのころ、現在の利根川流域には常陸川と呼ばれる河川が谷津の水を集めて流れ出し、流域一帯は沼沢地しょうたくちとなっていた。この地域の河川としては、北側に鬼怒川があり、途中小貝川を合わせて東に流れ、香取海（現霞ヶ浦及びその一帯）方面へと通じていた。

1 沼よりも浅く、水深1m以下で、葦などの抽水植物が繁茂する場所

利根川の変遷の項で述べた通り、利根川東遷の結果、周辺地域では水害の記録が散見するようになる。

延宝3（1675）年には、利根川の洪水で竹袋村（現印西市）の外堤が崩れて手賀沼落堀が埋まった。その結果、逃げ場を失った水が手賀沼の内水氾濫を引き起こす要因となった。利根川の洪水は江戸後期56年間で26回にのぼり、周辺地域を悩ませた。

布佐の堤防は、その強固さで近隣では有名で、天明6（1786）年、弘化3（1846）年の大洪水でも崩れなかった。しかし、明治3（1870）年の洪水時に布佐の堤は決壊し、「切れ所沼」を作った。同沼はその後長く放置され、魚釣りの名所ともなっていたが、昭和27（1952）年の利根川改修の際に、河道を浚渫した土砂によって埋め立てられた。

明治時代になっても洪水の被害はなかなか治まらず、利根川・手賀沼周辺の村々は被害を受けた。明治33（1900）年になってようやく本格的な洪水防御のための河川改修がはじまった。工事はまず佐原以下最下流から着工し、取手から佐原に至る52kmは第2期工事として明治40（1907）年に着手し、昭和5（1930）年に全工程を終えた。

近代的な改修工事がなされたものの、昭和10（1935）年には台風により洪水が発生した。その後も洪水が度重なった結果、利根川の水を東京湾に流す放水路が計画され、工事が始まったが、太平洋戦争によって中断された。この放水路計画は戦後になって上流のダムで水量を調節することで不用となり、幻の計画となった。



図25 利根川・手賀沼周辺の村 織田完之編『印旛沼経緯記』（明治26（1893）年8月）

②手賀沼の洪水について

江戸時代初期、利根川東遷事業が進められるなかで、手賀沼干拓も着手された。江戸幕府による利根川東遷事業の進行とともに、江戸時代から昭和時代にわたる300年間、沿岸の低地は水量を増した利根川からの頻繁な水害の発生に悩まされ続けることになった。

江戸時代の手賀沼洪水の大きな特徴は、堤防に埋め込まれた排水用の扉である木製の「入樋」の破壊によって起きたものである。利根川の水位が上がると、水位の低い手賀沼に水が直接流れ込み、水量の上がった利根川の水を手賀沼が直接受けるかたちになった。水害から免れるために水塚^{みづか}と呼ばれる土地を一段高くした場所に蔵を建てることや、屋敷一帯に盛り土をすることもあった。現在でも旧井上家住宅にその様子が残る。

明治になると、手賀沼の東部で干拓を進めるために機械排水を使用し、強制的に手賀沼の水を利根川に排水するようになった。ただし、排水能力はまだ低く、利根川の堤防改修工事の進捗と相反する形で水の出口を失った手賀沼沿いは、滞留した雨水によって内水氾濫が頻発するようになった。昭和13（1938）年と同16（1941）年の洪水は手賀沼沿岸のみならず、布佐地区の大部分を水没させるような壊滅的な被害を及ぼした。

手賀沼の洪水がある程度抑制されるようになったのは戦後である。手賀沼国営干拓土地改良事業の進捗に伴って手賀排水機場が整備され、昭和31（1956）年11月の完工式を経て本格的に始動し、昭和43（1968）年5月にその事業の終了をもって手賀沼の治水事業が完成した。



写真32 切れ所沼（昭和初め）
（『我孫子～みんなのアルバムから～』より）



写真33 手賀沼からの洪水の被害を受けた
布佐町の様子（昭和16年）
（『我孫子～みんなのアルバムから～』より）



写真34 昭和6年に撮影された旧井上家住宅
3棟の蔵が水塚の上に建っている

③東日本大震災と台風による水害

平成23(2011)年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)は、国内観測史上最大のマグニチュード9.0を記録した。我孫子市では重傷者以上の人的被害はなかったものの、激しい揺れや地盤の液状化により家屋や生活基盤施設、公共施設などに大きな損害を受けた。特に市域東端の布佐東部地区では、大規模な地盤の液状化が発生し、市内全壊家屋の8割以上が集中する被害となった。被害が集中した地区は、明治3(1870)年に利根川の堤防が決壊してできた「切れ所沼」や湿地を昭和27(1952)年に埋め立て、その後、宅地化した場所にあたる。

また、平成25(2013)年10月16日には、台風26号による浸水被害が発生した。一部の建物では床上浸水になるほどの集中豪雨だった。このような水の被害を防ぐために布佐ポンプ場が平成27(2015)年に完成した。



写真35 平成23年3月11日
東日本大震災時の布佐地区の様子

(5) 近代における我孫子市ゆかりの人物

我孫子市にゆかりのある代表的な人物を紹介する。

まつおかかなえ

松岡鼎 (1860～1934)

医師。播磨国に生まれ、教師を経て東京大学医学部に入学し、医師となる。誘われて布川（茨城県利根町）の医院を継ぎ、弟の柳田國男は幼少期に布川で過ごした際の体験から民俗学を志したとされる。後に布佐に移住し「^{りょううんどう}凌雲堂医院」を開業し、通常の診療の他にも布佐小学校の校医を勤め、地元の医療を担った。また町長にも選ばれ、栄橋の架橋にも携わった。このほか、地域住民の文化向上を目的に千葉県内でも早い段階で「布佐文庫」を開設し、岡田武松や自らの兄弟、町民有志と協力し、漢学の書籍を中心に約5,000冊を集めた。



写真36 松岡鼎
（『我孫子～みんなのアルバムから～』より）

かのうじごろう

嘉納治五郎 (1860～1938)

柔道の創始者。講道館を開き、柔道の普及に努めた。教育者としても知られ、東京高等師範学校（現筑波大学）の校長として、近代教育の確立に貢献した。後半生には東洋初の国際オリンピック委員として活躍、幻の東京オリンピック（昭和15〈1940〉年開催予定）の誘致にも成功している。明治44（1911）年に別荘（現緑1丁目）と農園（現白山1～3丁目）を構えると、それを契機として甥の柳宗悦や教え子の村川堅固がこの地に居宅や別荘を設け、「別荘地我孫子」の先駆けとなった。また杉村楚人冠や村川堅固らと手賀沼^{ほしうかい}保勝会を結成して、環境保全運動と手賀沼を活かした町おこしに尽力した。



写真37 嘉納治五郎
国立国会図書館
「近代日本人の肖像」より

嘉納治五郎生誕160年にあたる令和2（2020）年に嘉納治五郎別荘跡地に「嘉納治五郎先生之像」を建てるため市民団体が寄附を集め、同年4月に現地に像を建立した。

いづみよしお

飯泉喜雄 (1868～1906)

我孫子町長。明治29（1896）年の常磐線開通に先立ち私財を提供して我孫子駅（我孫子停車場）を誘致した。その後、停車場と水戸街道をつなぐ道を作った。この道は現在でも停車場線と呼ばれている。

平成15（2003）年には飯泉喜雄を顕彰するため市民の寄附が集まり、機関車型の「飯泉喜雄顕彰碑」が我孫子駅南口に建てられた。



写真38 飯泉喜雄

ちわきもりのすけ
血脇守之助 (1870～1947)

我孫子宿の旅館「かど屋」の加藤家長男として生まれる。白井の血脇家の養子となり血脇姓を名乗る。慶応義塾に学び、英語教師として勤務していた際に歯科医に興味を持ち、高山歯科医学院に入学し、歯科医となる。後にその経営を受け継いで東京歯科医学院（現東京歯科大学）を設立し、生涯にわたって歯科医師の育成と社会的地位の向上に努めた。世界的に有名な細菌学者の野口英世のよき理解者で、最大の支援者とも言われている。手賀沼公園には「血脇守之助碑」が立ち、彼の功績を顕彰している。



写真 39 血脇守之助

すぎむら そじんかん
杉村楚人冠 (1872～1945)

和歌山県出身のジャーナリスト。本名は「^{こうたろう}廣太郎」で、「楚人冠」はペンネームである。東京朝日新聞に入社し、イギリス特派員としてイギリスの先進的な新聞経営を学んだ。その経験をもとに「縮刷版」の発行や、正確な報道を支えるための調査部、報道の自己検証と人権保護のための記事審査部など、ジャーナリズムが言論形成に果たす役割を模索する。その行動は記者の社会的地位の向上につながった。



写真 40 杉村楚人冠

明治 44 (1911) 年鴨猟の取材で初めてこの地を訪れ、手賀沼の風景を気に入ったことがきっかけで、明治 45 (1912) 年に別荘を設けるため土地を購入した。嘉納治五郎とほぼ同時期に購入しており、初期の別荘の住人である。大正 12 (1923) 年の関東大震災がきっかけで翌 13 (1924) 年に大森から家族で転居。昭和 20 (1945) 年に亡くなるまで我孫子駅から有楽町にある東京朝日新聞社に出勤した、当時としては珍しい通勤サラリーマンであった。杉村楚人冠が考案した写真新聞『アサヒグラフ』に随筆「湖畔吟」を連載し、我孫子のまちを全国に紹介した。そのほかにも手賀沼の景観を守るために別荘の住人とともに「手賀沼保勝会」や村の若者の余暇のために俳句結社「湖畔吟社」などをつくって地域に貢献した。杉村楚人冠の住居は、「杉村楚人冠記念館」として保存され、彼の暮らしを伝えている（建物 4 棟は我孫子市指定文化財）。



写真 41 杉村楚人冠記念館 (サロン)

写真 42 楚人冠句碑
(河村蜻山作)

いのうえ じろう
井上二郎 (1873 ~ 1941)

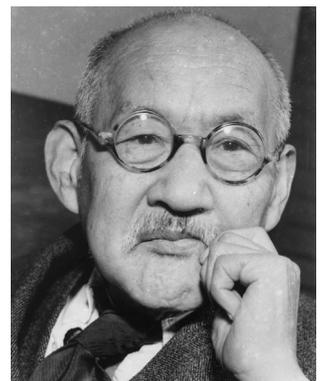
井上家 12 代目当主。今から約 300 年前の享保年間（1716 年 ~ 1735 年）に江戸から手賀沼干拓に参入した井上家に、明治 30（1897）年婿養子として入った。東京帝国大学工科大学大学院で土木工学を学び、土木技師として各地の水門、水路などを建設した。昭和 2（1927）年に手賀沼干拓に専心するようになり、土地整理組合の結成、トロッコや動力ポンプなど、最新の機械技術をもって手賀沼干拓を進めた。昭和 6（1931）年には干拓事業が一応の成功をみた記念として新土蔵をコンクリート造で建築し、母屋の式台玄関を再建設した（建築物 9 棟は我孫子市指定文化財）。同 10（1935）年には、干拓した相島新田が新嘗祭献穀田にいなめさいけんこくでん¹に指定される栄誉を受けた。井上二郎の死後、彼の考え方「開発済世かいはつさいせい」（新田開発を通じて世の中を豊かにする）を記念した碑が、昭和 26（1951）年、住宅北側に建てられた。



写真 43 井上二郎

おかだ たけまつ
岡田武松 (1874 ~ 1956)

気象学者。布佐生まれ。明治初期の海難事故や布佐を襲う洪水被害を目の当たりにして気象学を志したと言われる。帝国大学理科大学物理学科を卒業後、中央气象台（現気象庁）に勤め、気象予報の精度向上を目指し、海洋气象台や地方測候所の設置や気象技術者の養成のため測候技術官養成所（現気象大学校）の設立に尽力した。日露戦争の際には日本海海戦の気象予報を的中させ、「気象学の父」とも呼ばれる。昭和 16（1941）年、気象情報の独占を目論む軍部に反発して、永く勤めていた气象台長（現気象庁長官）を退職。布佐の自宅を開放して学習の場を提供するなど、後進の育成、布佐の文化振興に努めた。

写真 44 岡田武松
(岡田家蔵)

むらかわけんご
村川堅固 (1875 ~ 1946)

東京帝国大学教授（西洋古代史）。第五高等中学校（現熊本大学）に入学し、校長として赴任した嘉納治五郎の薫陶を受け、生涯の師弟関係をもつ。卒業後、東京帝国大学文科大学史学科に進み、嘉納治五郎の秘書をしながら大学院へと進む。最先端の西洋史学を学ぶためドイツに留学後、東京帝国大学教授となった。大正 6（1917）年、土地を購入（現在の寿 2 丁目）し、大正 10（1921）年、我孫子宿本陣の離れを自分の敷地に移築して別荘の「母屋」とし、その後、朝鮮旅行の印象をもとに、昭和 3（1928）年に「新館」を建築した。



写真 45 村川堅固

1 新嘗祭のときに使われる供御米を収穫する斎田。東日本の斎田は悠紀田、西日本の斎田は主基田と言われ、京都を境に斎田が各 1 カ所ずつ選ばれる

新館には手賀沼を見わたせる大きな張り出し窓があり、手賀沼の眺望が楽しめた。別荘は堅固とその息子で東京大学文学部教授を務めた村川堅太郎けんたろうの二代にわたって所有された（敷地〈母屋・新館含む〉は我孫子市指定文化財）。



写真46 旧村川別荘（新館）

なかの はるふさ
中野治房（1883～1973）

植物学者。湖北の名主であった中野家に生まれ、東京帝国大学理科大学植物学科を卒業し、東京帝国大学理学部教授を務めた。諏訪湖、野尻湖、手賀沼の水生植物を研究し、手賀沼で水草「ガシャモク」を発見した。大正9（1920）年、我孫子市内で唯一出版された地域の歴史や当時の状況が詳細に記された『湖北村誌』の校閲のほか、湖北村の村長などを務め、地域に貢献した。

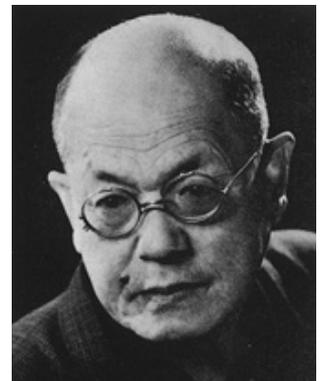
しが おや
志賀直哉（1883～1971）

小説家。仲間と共に雑誌『白樺』を創刊し、小説家としてデビュー。柳宗悦の勧めで大正4（1915）年に移住し、同12（1923）年まで住む。その間、白樺派の若い芸術家たちとの交友を通じて創作意欲を高め、父との不和を解消できた喜びから「和解」を発表し、その他に「城の崎にて」「小僧の神様」「暗夜行路（前編）」などの代表作を執筆した。邸宅跡は公園として整備され、市指定文化財の書齋が残っている。

写真47 志賀直哉
国立国会図書館
「近代日本人の肖像」より

むしやこう じさねあつ
武者小路実篤（1885～1976）

小説家。学習院中等科で志賀直哉と出会い、友情を育む。トルストイに心酔し、小説家を志し、雑誌『白樺』同人となる。大正5（1916）年、志賀直哉が所有していた土地に自ら家を設計し、移住した。戯曲などを執筆する傍ら、理想郷「新しき村」を着想し、2年ほど過ごして「新しき村」を設立した宮崎県に旅立った。武者小路実篤が暮らした場所は、現在では民間所有だが、「旧武者小路実篤邸跡」として、イベント時などに公開されている。

写真48 武者小路実篤
国立国会図書館
「近代日本人の肖像」より

バーナード・リーチ（1887～1979）

白樺派のイギリス人陶芸家。明治42（1909）年に来日。上野桜木町でエッチング教室を開き、柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤ら

と出会う。その後、陶芸家六世尾形乾山^{おがたけんざん}に弟子入りし、陶芸家の道へと進んだ。大正5(1916)年に柳宗悦邸(三樹荘)内に窯を築き、平日は工房で柳の家族と暮らしながら作品を作った。その際、地元出身の大工と交流し、自らデザインした椅子を大工に作らせた。その椅子は、現在旧村川別荘の新館に残っている。しかし、大正8(1919)年5月26日、窯焚きの際に出火し、工房と窯焚きや釉薬の調合記録などが全焼した。この出来事がきっかけで、工房を再建することなくこの地を離れた。後に陶芸家、濱田庄司^{はまだしょうじ}と共にイギリスに戻り、産業革命によって失われつつあったスリップウェアなど伝統的な陶芸の復活を主導し、柳宗悦が提唱した「民藝運動」を世界に紹介する役割を担った。

昭和49(1974)年にバーナード・リーチ碑が市民の手によって手賀沼公園に建てられた際も我孫子市の住人との交流が続いており、「手賀沼で過ごした年月が私の生涯を通じて最も幸福な時」と伝えたという。



写真49
バーナード・リーチがデザインした三角椅子



写真50 バーナード・リーチ碑

柳宗悦(1889～1961)

宗教哲学者。志賀直哉、武者小路実篤とともに明治43(1910)年、雑誌『白樺』を創刊、新たな芸術や文化の創造をめざした。大正3(1914)年、妻で声楽家の柳兼子^{やなぎかねこ}とともに移住し、白樺派の文人たちが定住するきっかけとなった。柳宗悦は叔父の嘉納治五郎が命名した「三樹荘」(現在は民間所有)に住み、職人が無心で作ったものが美しく優れていると説き、「民藝運動」を提唱して伝統工芸や技術継承の重要性を日本のみならず世界に発信した。



写真51 柳宗悦

河村蜻山(1890～1967)

京都生まれの陶芸家で帝国美術院展覧会(帝展)委員を務めるなど、かねてから陶芸界で有名であった。昭和13(1938)年にこの地へ転居し、柳宗悦が住んだ三樹荘に16年間暮らす。その間に太平洋戦争が勃発したため窯焚きができず、染付の作品を多く残した。自身の陶芸活動だけでなく、我孫子尋常小学校(現我孫子第一小学校)で楽焼¹の教室を開き文化振興に努めたほか、杉村楚人冠が主宰する俳句結社「湖畔吟社」の会員になるなど、地元との交流を深めた。杉村楚人冠の死後、湖畔吟社の同人に頼まれて、陶製の句碑を制作。この句碑は現在も楚人冠公園に残る。



写真52 河村蜻山

(6) 町村合併の歴史

現在の我孫子市の市域は、近世においては布施村、根戸村、久寺家村、都部村、岡発戸村、下ヶ戸村、青山村、柴崎村、高野山村、我孫子村（我孫子宿）、新木村、日秀村、古戸村、中里村、中峠村、布佐村ほか 19 の新田（このうち定住者がいた新田は 13）で構成されていた。

明治 7（1874）年になると、江蔵地新田が江蔵地村となり、明治 21（1888）年には布佐村が布佐町と名称を変更した。

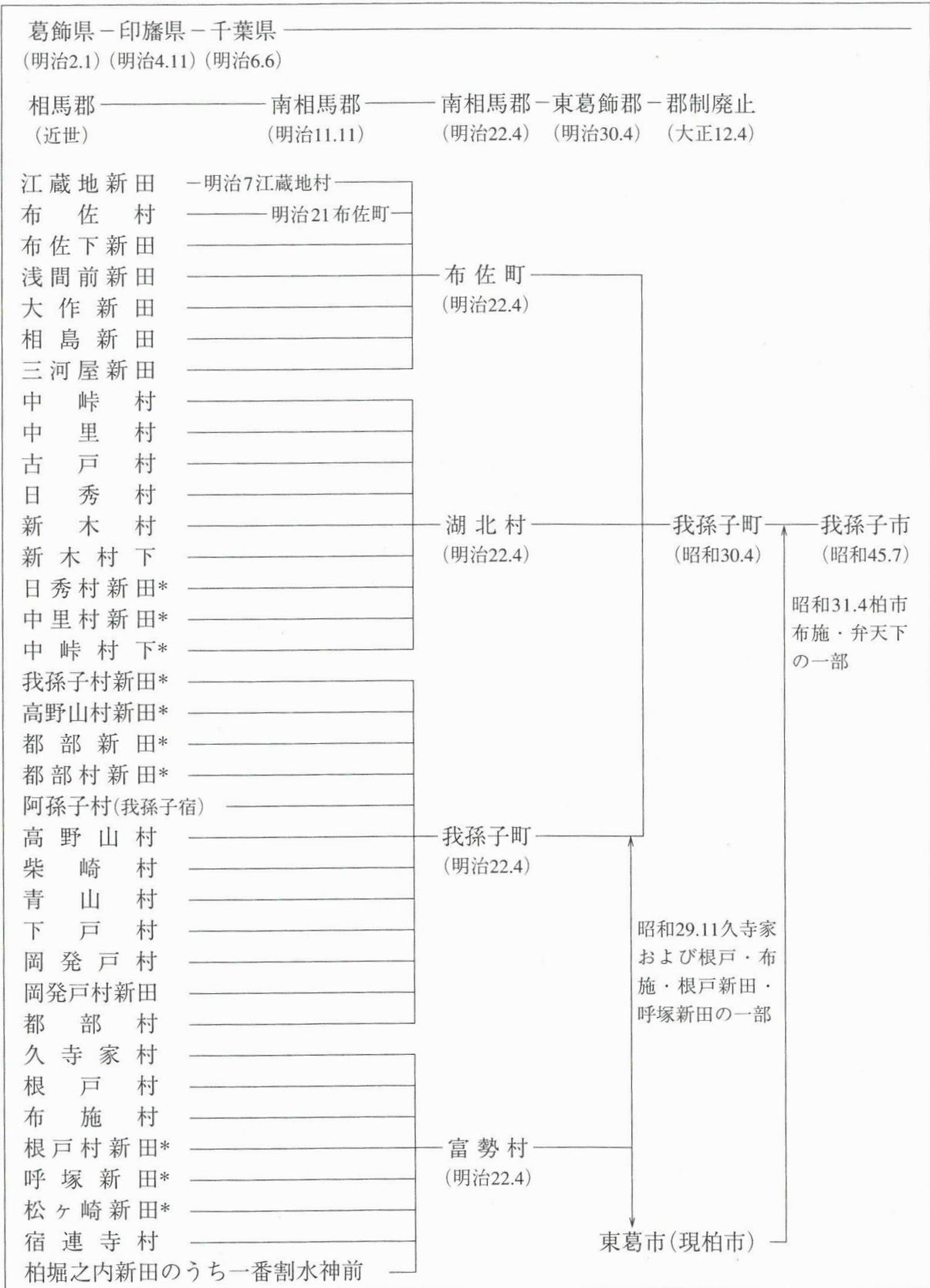
明治 22（1889）年の市制・町村制施行により、宿連寺村、布施村、根戸村、久寺家村は富勢村に、都部村、岡発戸村、下ヶ戸村、青山村、柴崎村、高野山村、我孫子村（我孫子宿）は我孫子町に、新木村、日秀村、古戸村、中里村、中峠村は湖北村に、布佐村、江蔵地村は布佐町に編入された。

昭和 29（1954）年に久寺家および根戸・布施・根戸新田・呼塚新田の一部を我孫子町と東葛市（柏市）とに分け、昭和 30（1955）年に富勢村（一部）、我孫子町、湖北村、布佐町が合併した。その後、昭和 31（1956）年に柏市布施・弁天下の一部が合併し、昭和 45（1970）年我孫子市となり、令和 2（2020）年で市制施行 50 年を迎えた。

明治 22 年の市制・町村制施行により誕生した我孫子町、湖北村、布佐町は、昭和 30 年に 2 町 1 村が合併するまで約 50 年間続いた。そのため、合併以降も地区ごとに独自の文化を色濃く残している。



図 26 我孫子市の旧行政区分で分けた地区



注) *を付した村は明治22年4月に印旛郡より南相馬郡に編入

図27 我孫子市域町村分合表

(7) 団地造成と区画整理

昭和30年代以降、人口増加と住宅供給不足が社会問題となる中、我孫子市でも大規模な団地造成や区画整理を行って宅地開発の動きが起こり、昭和37(1962)年の湖北台団地造成以降、つくし野、天王台、柴崎台、青山台、中峠台、南新木、布佐平和台などの区画整理が平成まで続けられた。この結果、東京のベッドタウンとして、いわゆる「千葉都民」と呼ばれる新住民が定住化するようになり、新旧コミュニティの調整と新たな市民アイデンティティの醸成が課題とされるようになった。



湖北台団地造成の様子(昭和40(1965)年ごろ) 左(写真53):造成中 右(写真54):造成後

(8) 伝承

① 平将門伝承

湖北地区、特に日秀周辺には平将門に関する伝承が残っている。平将門の再興を祈願したとされる「将門神社」、平将門が堀り、軍用に供した井戸とされる「将門の井戸」がある。また、観音寺の本尊・聖観世音菩薩は平将門の守り本尊であり、寺院の境内にある「首曲がり地蔵」は、平将門調伏のために創建された成田山新勝寺を避けて首をかしげていると言われている。その他、この地域には平将門を裏切ったとされる桔梗御前の故事にちなんで桔梗を植えることを禁じ、キュウリの断面が平将門の紋である九曜紋に似ていることから、輪切りにして食べることを禁じる風習が残っている。平将門伝承は市内のほかの地区でも語られており、柴崎地区には、平将門の家臣が落ち延びた末に首を切られた場所があり、その地に祟りが起こるといわれるので、小さな祠を建て「柴崎様」と呼んで祀られている。

平将門の乱について記した『しょうもんき将門記』に「相馬郡大井津を以て号して京の大津と為さん」(柏市大津を京の大津=琵琶湖の湊、のように取り扱う)とあり、下総国相馬郡を影響下に置いていたように記される。しかし、『将門記』は平将門没後相当後の時期に記述されたものであり、平将門の活動地域は下総国さしま猿島郡(現茨城県坂東市付近)を中心としたものであることから、そのまま史実として受け止めることはできない。この地を治めた相馬氏が同じ平氏の一族であり、武門の誉れとされた平将門とのつながりを強調するために付加されたのではないかと考えられる。また、江戸時代中期以降、日秀村が新木村から分立

するに伴い、人々の精神的な拠り所として将門神社（将門社）が祀られ将門信仰が興ったことも、現在まで伝承が続く理由と言える。



写真 55 将門神社入口



写真 56 将門の井戸

②塚と手賀沼の伝承

そのほか、特に注目できるものとして、手賀沼にまつわる伝承がある。例えば「大鰻の祟り」という伝承では、手賀沼で大きな鰻が取れたので家に持ち帰ったところ、祟りが起きた。そこで鰻を甕かめに入れて埋め、塚を築いて祀ったところ、祟りが収まった、またはその塚を守った子孫が長寿となった、というものである。実際に都部新田には「鰻魚及一切水族霊」と記された供養塔（鰻塚）があり、この伝承は人々が鰻をはじめとした手賀沼の漁業によって生計を立てていたことを示している、と考えられる。

「藤姫伝承」では我孫子城主の娘藤姫は対岸の豪族の息子と縁組したが、たくらみによって穴の開いた船に乗せられ、手賀沼を渡る途中入水した。その霊は大蛇となり、最後には沼の主である大鰻となった、と伝わっている。大蛇は竜と同じく水を司る神であり、それを祈祷によって大鰻に転化させていることが手賀沼の生業と密接に関係しており興味深い。正泉寺にある「血盆経縁起絵巻」には、血盆経の一部（一卷）が手賀沼に出現した様子が描かれている。これが「都部」という地名の由来であると言われ、伝説と地名の由来がつながった例である。この血盆経は遠近の女人の信仰を集め、紀州藩第6代藩主徳川宗直の五女桂香院の庇護を得ていたことから信仰が盛んであったことがわかる。

手賀沼に面し並んでいた二つの小高い塚についての伝承もある。この塚はかつて擔塚にないづかと呼ばれており、戦国時代には警鐘を備え、敵の侵入を付近の芝原城に知らせる役割を担っていた。塚から近隣の城への敵侵入を知らされた稲田姫は、軍を率いて手賀沼を渡り救援に向かったが、天候が悪く船が転覆し遭難してしまったという。現在、擔塚は、昭和37（1962）年からはじまった湖北台団地の造営のためになくなったが、東側の塚の上にあった「浅間社」の碑は中里の諏訪神社に移り、今もなお塚の名残を伝えている。

市内の城跡に因んだ伝説もある。例えば、芝原城城主河村出羽守の家臣が落城の際、従士とともに自害したといわれる順道塚じゅんどうづかや、先述の藤姫も我孫子城主の娘であった。このように市内に伝わる伝承は人々の営みと土地が深く関わりあった結果であると推測できる。